九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

壽里竜著『ヒュームの懐疑的啓蒙』

鎌田, 厚志
九州大学大学院法学研究院 : 協力研究員

https://doi.org/10.15017/1916263

出版情報：政治研究. 64, pp.75-82, 2017-03-31. 九州大学法学部政治研究室
バージョン：
権利関係：

書評

壽里竜著『ヒュームの懐疑的啓蒙』
Ryu Susato, *Hume's Sceptical Enlightenment*, Edinburgh University Press, 2015, Xii＋348pp.

鎌田厚志

はじめに

デイヴィッド・ヒュームに対する関心は、生誕から三百年以上経った今日ますます盛んである。しかし、その思想解釈は多様を極める。理由は、その著作が哲学・歴史・政治・宗教など多岐に渡る上、両義的な要素を含むためである。ヒュームは「中庸の立場、あるいはラディカル、あるいは反啓蒙の思想家とさえ、そしてあるいは保守主義、自由主義、功利主義」（二八三頁）といった相矛盾するラベルを貼られてきた。

本書は、そうした複雑な思想家・ヒュームを「懐疑的啓蒙」(Sceptical Enlightenment) として一貫して把握する。本書は、まず「啓蒙」について問い直し、「懐疑的啓蒙」という分析視角を確立したうえで、ヒュームの認識論と政治学の関連を把握し、具体的な諸事項に対するヒュームの言説を分析している。国内外の研究を渉猟しヒューム解釈の個々の論点を抽出しつつ、同時代の思想家たちと縦横無尽に比較することでその思想的特徴を本書は浮彫にしている。

一　本書の内容

本書は、「序論」と七つの章と「結論」から構成されている。「序論」(Introduction) では、著者はまず「啓蒙」を問い直す。ヒュームは、一般的な個人主義・合理主義といった「啓蒙」のイメージとはそぐわない思想家である。たとえば、J・S・ミルが、ヒュームの懐疑主義はトーリー主義を帰結したとしているように、啓蒙からは程遠い保守反動というイメージがつきまとってきた。

著者は、近年の研究が「啓蒙」の多様性について解明してきたことを踏まえて、啓蒙を「初期近代／近代のヨーロッパと新世界において進行する文明の過程に対する哲学者たちに共有された敏感な感性と、この歴史的自覚の上に立つ知識人たちが提示した一連の問題や論点」（七頁）に関連した思想的運動とみなす観点を提起する。

その一連の問題とは、文明の原動力や過程への評価、社会

の向上の方法といった事柄だった。こうした課題の共有として啓蒙をとらえた場合、多様な立場が存在しうることになる。

そのうえで、著者は「懐疑的啓蒙」という分析視角を提起する。これは、フォーブズがヒューム解釈の枠組として用いた「懐疑的ウィッグ」[1]とは異なる。著者は、通俗的ウィッグと懐疑的ウィッグの差が必ずしも明らかでないという近年の研究や、ウィッグはイングランド国内の文脈に限定される点から、啓蒙主義の知的活動の中でヒュームを分析する姿勢を打ち出す。

ヒュームはエピクロス主義の伝統と世俗主義の点等で密接に関連していた。しかし、エピクロス主義の物質還元主義とは明確に距離を置いていたことを著者は指摘する。あらゆる哲学的ドグマに対して懐疑を抱く「懐疑的啓蒙」がヒュームの立場だったと著者は述べる。

「懐疑的啓蒙」は、物事の偶然性についての認識や、物事の境界線についての懐疑や、文明社会の予期せぬ変遷についての感覚を特徴とする。「懐疑主義の精神」がヒュームの著作全体に浸透していることが、以下の章で検証される。

第二章「「想像の帝国」：ヒュームの社会哲学における観念連合」（'The Empire of the Imagination': The Association of Idea in Hume's Social Philosophy）では、著者はヒュームの認識論哲学における観念連合について論じる。先行研究では、想像力が観念を連合して人間の信念（belief）を形成するというヒュームの観念連合論は、のちの著作にあまり登場しなくなるためさほど重視されてこなかった。しかし、観念連合論は、ヒューム思想に独特の要素をもたらし、政治・社会についての議論の基調をなしていると著者は指摘する。

他の思想家たちと異なり、ヒュームは、想像力は一定の規則を持つと論じた。想像力による観念連合は、一定の規則を持つため、正しく用いれば正しい判断や推論を行うことができる。さらに、ヒュームは観念連合論に基づいて因果性を説明する。ロックの労働所有説とは異なる仕方で所有の成立を論じる。つまり、一定の仕方において、当該の人物と所有の観念が安定的に結び付けられ、その上に所有の規則が成立するとする。王位継承に対する忠誠心の変遷に対しても、想像力の働きおよび世論の働きからヒュームは説明する。

これらの人間の判断や習慣は可変的なものであり、観念連合という想像力の働きに基づくがゆえに、不安定さや不確実性を完全に払拭することはできない。その点で、ヒュームの観念連合論は懐疑主義と密接な関わりを持っている。

第三章「「既存のもの」とは何か？：ヒュームの社会哲学における世論」（'What is Established'?: Hume's Social Philos-

ophy）では、ヒュームにおいては想像力の働きの所産である「信念」と「世論」（opinion）が互換的に用いられていることを踏まえた上で、ヒュームの政治・社会の議論において重要な役割を果たしている「世論」について考察している。

本章で著者は、先行する他の思想家らとヒュームの世論に関する議論の類似点や相違点を分析する。さらに、『人間本性論』やエッセイの議論を辿りつつ、政府に対する忠誠心を構成するのは公共の利益（public interest）に関する世論だとヒュームが述べていることと、しかも公共の利益は明確な基準をもって述べることができるものではなく、ただ世論としてのみ存在するとヒュームが述べていることを指摘する。

ヒュームは、安定した規則的な政治を目指して特定の人間の影響を排除することを目指した。と同時に、そのことは人々の集合的な意見を排除しようとすることを意味したのではなかったことを著者は指摘する。人々の集合的な意見である世論を重視することと、特定個人の影響を排除するヒュームの政体論は矛盾しない。

ヒュームの後期の主著『イングランド史』には、世論という用語は頻出しないが、「その時代の原則」（the principles of the times）（七三頁）といった表現で同様のことが述べられている。また、人々の持つ意見の変化によってスチュアート朝の君主たちの悲劇が引き起こされたと指摘する。

時代ごとの世論を重視するがゆえに、ヒュームは「古来の国制論」を批判し、抵抗権論と絶対的服従論の両方に対して批判を行った。ヒュームは、確立されたものに対しては懐疑的なまなざしを維持しつつも、暫定的な指針として信頼する姿勢を持った。「ヒュームにとって重要なことは、政治的な実践が十分に確立されたものであることや、可能な限り多くの人々の支持を得ていることだった。」（八〇頁）既に存在しているものに対する世論を政治的な熱狂から守るため、制度の変遷等の歴史を学ぶことの有効性をヒュームは信じていた。

第四章「「洗練」と「悪しき奢侈」：ヒュームの奢侈擁護における陰影」（'Refinement' and 'Vicious Luxury': Hume's Nuanced Defence of Luxury）では、ヒュームの奢侈論が検討される。奢侈や商業を擁護肯定する一方で、ヒュームは奢侈を手放しに礼賛したわけではなく「悪しき奢侈」を批判したことに著者は注意を促す。

マンデヴィルら同時代の思想家と比較検討する中で、商業を道徳的に正当化する点にヒュームの特色があることを著者は明らかにする。一方で、「悪しき奢侈」や放蕩については、エッセイにおいても『イングランド史』においてもヒュームは一貫して批判していることを指摘する。

ヒュームは、商業や洗練を擁護し、自然な生だとして評価した。一方で、宗教的な生は「人工的生」であり堕落をもたらすと批判した。ヒュームは教育による社会改良を重視せず、利己心に基づき商業や洗練の中で自然な生を謳歌するところに人間の幸福や健全さがあると考えた。

第五章「「聖職者の圧制」の統御：ヒュームの宗教制度論」（Taming 'the Tyranny of Priests': Hume's Advocacy of Religious Establishments）では、『イングランド史』において、一方で宗教を批判しつつ、既存の国教会を評価し支持するという、ヒュームの宗教論が抱える矛盾を検討している。

ヒュームは、英国国教会を中庸であり相対的に受容可能としている。しかし、その英国国教会評価は、そもそも実際に存在する宗教はどれも誤った宗教であるという理解の枠組を超え出るものではなく、極端な熱狂にも極端な迷信にも陥らないという意味での中庸を意味していた。ヒュームは聖職者制度を一貫して批判した。ヒュームが『イングランド史』でスチュアート朝の君主らに寛容な評価をするのは、個人の性格よりも時代の精神の変化を重視するからだった。

ヒュームは、ルソーのような市民宗教を構想しない。ポジティブな役割を宗教に期待することはなく、教会の影響力を抑え、去勢することを専ら目指した。ウィルクス事件に対する批判も、彼らの主張が「あまりにも理性的だったからではなく、むしろあまりにも非理性的だったため」（一六六頁）ヒュームは批判したと著者は指摘する。ヒュームは非理性的な迷信や熱狂を一貫して批判し続け、宗教の害を根絶できないのであれば、その害を弱め薄めることを目指した。

第六章「「デモクラシーを洗練」する方法：ヒューム政治学の発展としての「完全な共和国についての設計案」（How 'To Refine the Democracy': Hume's Perfect Commonwealth as a Development of his Political Science）では、ヒュームのエッセイ「完全な共和国についての設計案」が、不安定な国制の安定化を図るというヒュームの他の著作の内容と一貫していることが分析される。

著者は、懐疑主義と理論的追求は両立すると述べる。人間本性の改善や完全化への懐疑と、人間の制度の脆さへの自覚を持つがゆえに、比較的安定した政体を理論的に追求したのがヒュームの政治思想だと著者は述べる。規則性という点で、ヒュームは特定個人に依拠する君主政よりも共和政を評価する。そして、共和国の内部を小さな集団に分け議員の選出方法を工夫することにより、共和国の安定性や分裂防止を図っているとする。

同章では、一七四五年のジャコバイトの乱以後の危機感の

変化や、混合君主政の不安定性が国債によって増幅しているというヒュームの認識も分析される。また、選挙の腐敗に対する批判が他のエッセイの中に見られることも指摘している。これら現実の諸問題に対する理論的な解決として、同エッセイは執筆されたとする。

人間本性への過度な改善可能性を断念する視点と、私的所有を否定していない点で、先行する他のユートピア論とヒュームの理想共和国論は異なっていると著者は指摘する。ヒュームは選挙権の拡大や政治参加の増大に幻想を持たず、政体の安定化を追求していた。しかし、一方で、ヒュームは頻繁な選挙や中間層の力の増大については支持したことも同章には指摘されている。

第七章「「絶えず流転するもの」としての人間社会：ヒュームにおける文明の振り子理論」（Human Society 'in Perpetual Flux': Hume's Pendulum Theory of Civilisation）では、ヒュームには文明の進歩があればいずれは衰退するという、一種の振り子理論、循環史観が存在していたと指摘される。

人間社会がその発展の極致に達したのか、あるいはまだその扉の前に立ったばかりなのかという当時の議論に対して、ヒュームはイングランドがある意味下降の過程にあり、政治的死すらもありうると考えていた。

ヒュームの循環史観は、循環の中の向上の局面として、商業や奢侈の向上の議論と矛盾しない。その一方で、技芸や洗練等はいつか極点に達して下降に向かうという認識がヒュームにあったことを著者は指摘する。

ヒュームのこの循環史観は、同時代の人間の無限の進歩を信じる啓蒙思想家たちと明確な相違が存在する。ヒュームは、なんらかの良きものが存在したとしても、それがいかに偶然の積み重ねの上に成り立っているか、それがいかに逸脱を招きやすいかを鋭く自覚していた。「近代的な諸価値がもろく壊れやすいものであるにもかかわらず、ではなく、そうであるからこそ、ヒュームは同時代人や私たちに近代的諸価値を育みそだてることを勧めている。」（二三八頁）という点に、著者はヒュームの特質を見出している。

第八章「「懐疑主義の第一人者」と「歴史の第一人者」：十九世紀初期のブリテンにおけるヒュームの影響とイメージ」（'The Prince of Sceptics' and 'The Prince of Historians': Hume's Influence and Image in Early Nineteenth-Century Britain）においては、十九世紀におけるヒュームについてのさまざまな人物の評価を詳細に検討し、ヒュームが歴史家としてのみでなく、政治哲学者としても影響を与えていたことが指摘される。ミルからマコーリーの登場に至るまで、ヒュー

ムにはさまざまなイメージが存在し、毀誉褒貶があった。

結論では、ヒュームがさまざまなテーマに関して、懐疑を誠実に把持し続けたことが指摘される。たとえば、ニュートンに対する評価に関しても、ヒュームは他の思想家と異なり、ニュートンが懐疑を保持し続けた点にその偉大さを認めていた。また、著者は、最後に、ヒュームの人間や人生への見方は社交的なものであることを指摘する。さらに、今日極端に細分化されてしまった諸分野を、対話に向けて開く最良の出発点として、ヒュームが存在することが述べられている。

二　本書の意義

本書は、二つの点で極めて大胆な挑戦をしている。一つは、各専門分野に限定されがちである今日のヒューム研究において、啓蒙という十八世紀を貫く大きなテーマを踏まえつつ、哲学・政治学・歴史学を横断して、ヒュームの全体像を明らかにしようとしている点である。二つめは、ヒュームにおける観念連合や想像力の議論と世論の議論の関係を指摘し、ヒュームの懐疑主義の哲学が世論の政治学を生み出している構造を明らかにしようとしている点である。しかも、それらは単に試みが大胆という点に終わらず、緻密な研究と明晰な文章によってしっかりと裏打ちされ極めて強い説得力と高い水準を有するものとなっている。

『人間本性論』において展開されている認識論は必ずしも十分に従来のヒューム政治思想研究では研究されておらず、哲学と政治学の関係の解明が不十分だったのに対し、観念連合や想像力の議論と世論の議論が密接に関わっていることを指摘している点で、本書は大きな意義を有する。「懐疑的啓蒙」という分析視角は、認識論と政治思想を横断してヒュームの思想を把握することに貢献している。また、十八世紀ヨーロッパの啓蒙全体の観点から、多くの他の思想家とヒュームの思想を具体的な論点ごとに精緻に比較分析し、ヒュームの特徴や立場を明確にすることにも本書は成功している。

さらに、本書の意義として、英語によって直接世界に向けて出版されている点が挙げられる。日本のヒューム研究の水準はすでに極めて高いものがあり、多くの優れた研究書が出版されているが、残念ながら英語で出版されない限り、日本以外の研究に必ずしも十分に研究成果が生かされない。本書は英語で直接、緻密な議論をヒューム研究の本場である英米文化圏に向けて発信しており、日本の高いヒューム研究の水準をあらためて世界に瞠目させるものと思われる。

三　本書の問題点

上記の意義を確認した上で、以下の三点の疑問がある。

一点目の疑問は、「懐疑的啓蒙」としてヒュームを分析した本書においては、具体的なブリテンないしイングランドの政治的文脈とヒュームの関連が必ずしも十分に分析されていないのではないかという点である。本書がフォーブズの「懐疑的ウィッグ」を用いない理由は首肯できる部分もあり、「懐疑的啓蒙」が大きな成果を上げていることも事実だが、ヒュームの政治的な意図が必ずしも解明されないのではないか。

もちろん、本書の対象はヒュームの政治的意図の再現ではなく、「懐疑的啓蒙」として啓蒙思想全体の中でのヒュームの特質を明らかにすることであれば、本書は成功しているし、この疑問は的外れなものかもしれない。しかしながら、ヒュームが不利益を覚悟しながらウィッグの人々の逆鱗に触れるスチュアート朝に好意的な歴史記述を発表したことや、もし自分が議員であればウォルポールを宮廷から追放することに一票を投じるとかつて述べていたことは、どのように理解すればいいのだろうか。懐疑主義や他の啓蒙思想家との応答関係からだけでは必ずしも解明できない部分が、ヒュームの言説には依然として残るのではないか。[2]

二点目の疑問は、ヒュームのエッセイ「言論・出版の自由について」(Of the Liberty of the Press) の位置づけが、本書の「世論」(opinion) に関する議論との関係でどうなるのかという点である。

本書では、観念連合論と世論の関係が考察され、世論の形成に基づいて政治社会が成立するとヒュームが考えていたことが分析されている。この点はヒューム政治思想研究において大きな意義を有するが、そうであるがゆえに、この世論の形成について、二つの党派が言論を通じてお互いに牽制しつつ切磋琢磨する内容のエッセイ「言論・出版の自由について」が十分に分析されていないのは残念である。言論の自由の全面開花を可能にするために、諸条件の安定化を図るところに「懐疑的啓蒙」の精神には意義があるのではないだろうか。

三点目の疑問は、ヒュームにおける「中間層」(middling rank of men)[3]や「中間権力」(middle power)[4]の議論とヒュームにおける文明の循環論との関係である。

「懐疑的啓蒙」としてヒュームが文明の衰退過程への認識を持ち、時に強い危機意識を持っていたことは本書に指摘されているが、ヒュームが特に強い危機感を述べるのはエッセイ「公信用について」(Of Public Credit) 等における「中間権力」の消滅に関連してである。一方、商業や奢侈に関連して

「中間層」が成長することに対しては極めて肯定的に述べている。しかも、この二つの現象は同時に進行している現象だった。ヒュームにおける「懐疑的啓蒙」という態度と中間層および中間権力という社会的要素は、どう関わるのか。前述の具体的な政治的文脈や世論の問題とも関わると思われる。

おわりに

宗教原理主義に関連したテロが後を絶たず、未だに多くの人々が重大な被害を受けている。その一方で、宗教が希薄となった先進社会では、相模原の殺傷事件のような痛ましい出来事が起こっている。宗教が熱狂や暴力をもたらすことから人類は未だに脱却できておらず、その一方で世俗主義が全てを覆う先進社会では人権や人間の尊厳の根拠が見失われる事態が生じている。

人間社会の根拠をキリスト教から切り離し、世俗主義的な根拠によって置き換えるという試みは、ヒューム一人に帰せられるものではない。しかし、ヒュームの「懐疑的啓蒙」は世俗主義の最も顕著な事例である。宗教原理主義の害毒を可能な限り薄め去勢するための貴重な参考になるかもしれない一方、世俗主義がそれ以前の知的伝統から何を切り離し何を喪失したかについても現代人は再考を促されている。

本書の「懐疑的啓蒙」という視角は、ヒューム研究として高い意義を有するのみならず、ヒューム研究の域にとどまらない、宗教と世俗主義の問題等について、大きな刺激を現代の私たちに与えてくれる。本書が結論でヒュームについて述べたのと同様に、本書自体が現代においてまさに多様な分野を横断する貴重な対話の良き出発点になることを疑わない。

注

(1) Duncan Forbes, *Hume's Philosophical Politics*, Cambridge University Press. 1975, pp.139-140. ダンカン・フォーブズ『ヒュームの哲学的政治学』、田中秀夫監訳、昭和堂、二〇一一年、一九〇頁。

(2) *Essays, Moral Political and Literary*, ed.by Eugene F. Miller, Revised Edition, Liberty Classics, 1985, p.576. 田中敏弘訳『道徳・政治・文学論集』名古屋大学出版会、二〇一一年、四六二頁。

(3) ibid., p.277. 同上二二七頁。

(4) ibid., p.358. 同上二八八頁。